

福祉が大切にされ平和であることを願う 35周年を迎えてあらためて決意すること

2015年6月6日 総会アピール
認知症の人と家族の会 総会参加者一同

「家族の会」は結成から35年を経過し、本日、全国47すべての都道府県から代議員とオブザーバーの計290余名が参加して総会を開催しました。

振り返れば、社会に認知症の介護の深刻さを訴え、のちには「ぼけても心は生きている」ことへの理解を広め、介護の社会化に尽力してきた歴史でした。

35年前に、「ここに介護で苦しむ家族あり」と声を上げたことは、認知症介護を家庭内の問題としてきた社会の有り様に一石を投じ、多くの家族に励ましを与え、「そうだこれは社会問題なのだ」との認識を広めました。

認知症の人と家族への理解は一朝一夕には進みませんでした。当事者どうしの励ましあい助けあいで日々の困難を乗り越え、仲間の輪を広げて、体験を語り、社会的施策を求めました。

結成以来今日まで、「家族の会」の判断の基準は「認知症の人と家族の幸せ」であり、行動の基本は「絶対に本人と家族の心から離れない」です。この「理念」の方針を忠実に守り実践してきたことが、私たちの主張と行動が社会に受け入れられ支持され、組織が団結し拡大してきた理由であると信じています。

この35年間に、日本と世界は大きく変化しました。

医療においても福祉においても、認知症への理解がなく行政施策皆無の時代から、介護の社会化を進める制度が発足し、医療も進み、本人と家族の視点を強調する“国家戦略”が定められるところまで来ました。公的サービス以外にも、認知症を理解し支援する取り組みが様々に展開されるようになりました。

世界においても、「家族の会」の誕生時には、カナダとイギリス、アメリカにしか存在しなかったアルツハイマー病協会が今や80カ国以上に存在するようになり、各国での取り組みも進んでいます。

このような明るい動きが進む一方で、わが国では、増税をしながらも福祉を切り詰め介護保険を後退させる動きが進められています。世界においては、国民の暮らしそのものを破壊する戦禍が絶えず、飢餓に苦しむ人々が存在します。明るさに目を奪われるだけでなく現実の厳しさも直視しなければならない時代ではないでしょうか。

私たちは、「ともに励ましあい助けあって、人として実りある人生を送るとともに、認知症になっても安心して暮らせる社会の実現」を願って歩んできました。その社会は、福祉を必要とする人々が大切にされるとともに、平和でなければならないと考えます。あわせて社会の各層の人たちの理解が進むことも大切です。とくに、JR列車事故損害賠償事案を審理中の最高裁が、家族の責任を問わない判決を出すことが強く求められています。

2017年に日本で開催するADIの国際会議が、世界と日本の認知症の人と家族に希望と平安な暮らしをもたらすことに貢献できるように、内外の人たちと力を合わせて取り組むことを決意します。そしてこういう時代だからこそ、いっそう、活動の三本柱一つどい(TSUDOI)、会報、相談一に力を注ぎ日々の支え合いを大切にします。 以上